

○素材、詩品

□素材を取捨選択する p228 「漢詩はじめの一步」 鈴木淳次 より

- ・自分が伝えたいことと直結する素材を、取捨選択することが大切です
 - … 見たもの、聞いたもの、感じたことを**素材として選び出す**
- ・読者は必ず詩を起句から順に読んでいくことを意識したうえで、読者の目の動きや立つ位置が不自然にならないように、言葉を並べる必要があります
 - … 場面の飛躍や唐突な感情描写などが起きないように
- ・あくまでも、他人が詩を読んだ時に、素直に情景や心情を理解してもらえるように、素材を選んだり、配置することを忘れてはなりません
- ・場面がパッと目に浮かぶような、素材の組み合わせ(取り合わせ)が大切です
 - … 視覚的に鮮やかに印象づける、遠近の対比や、色彩的な対比
聴覚から視覚へ、視覚から聴覚への対比

□詩の作り方(写実性と表現法) ❀ 「漢詩便覧」(綿引方風) より

- ・詩は**写実性**が大切な要素は、「時、処、情(虚)、景(実)」
更に大切なものは、「詩味(詩の香り)」
- ・韻文の根底には「**余韻**」が必要 ~ 心の琴線に触れたものだけを剪取すること

□「モノと心と言葉」について 「はじめての漢詩創作」 鷲野正明 より

「詩は感動をうたうものであり、感動のないところに詩は生まれません。」 ❀ p78

身の周りにはたくさんの“物”やいろいろな“現象”があり、これら外界のモノに触れた時、人は何かを感じ、心を動かされます。この時に心に生まれる情や志、「内なるおもい」が言葉によって表現されるのが詩です。

自分が感動を受けた外界のモノを今ここに見えるかのように具体的に表現し、自分が感動を受けた「場」に読者を引きこまなければなりません。

読者を自分の懐に入れて同じ感動を与えるためには、言葉を吟味し、感動を伝えるための工夫をして、「外界のモノ」と「内なるおもい」とを融合させる必要があります。

王昌齡は『詩格』のなかで、「思い」がどのように生まれるかを分析している ❀ p79

- ・取思 …外界のモノをたずね求め、モノからおもいを取得する
こちらから積極的にモノと関わり、心に響くモノを探しあてて「おもい」を取得するので、心は能動的で得られるものは主観的になる。
それだけに美に対する意識、自己が確立していなければならない。
- ・生思 …長い間精神をこらし修練を積んでもモノと心が合わず、疲れ果ててあきらめた時、ゆくりなくモノと応じあって、ふとおもいを生じる
モノに触発されるので、受動的であり、モノが心の中に飛び込んできて「おもい」が突然生まれる。
しかし、長い間精神をこらし修練を積む必要がある。
- ・感思 …前人のことばや作品をよく味わい吟詠しているうちに、それに感じておもいを生じる
対象が故人のことばや作品に限定されますが、心のはたらきは能動的でもあり、受動的でもあるということになる。
これは詩をたくさん読むことになるので、詩語も覚え、詩の構成も会得でき、入門の段階では良い方法かも知れない。

○押韻／平仄(七言絶句) 「一から始める漢詩の作り方講座テキスト」 永光龍より

・押韻要領と平仄公式

【押韻】 転句を除いた各句末の脚韻は、同じ韻目に属する韻字で押韻すること

【平仄】 ・各句の二字目は、起・結両句を同じ平仄とし、承・転両句はその反対の平仄にしななければならない

・二・四不同 (2字目と4字目)

- ・二・六対 (2字目と6字目)
- ・一・三・五不問 (1字目と3字目と5字目)
- ・下三連不許 (5～7文字目)
- ・四字目の孤平不可
- ・転句末(下三字)の「挟み平」は可
- ・三字目と五字目が共に入声の場合は、四字目の孤平が許される

・約束ごと他

- ・不(ず)、可(べし)などは、数字と同じく、転句の下三字に限り、平声の代用が出来る
- ・同字、同意の重出禁止 …… 一首の中に在ってはいけない
- ・冒韻(押韻する句中に脚韻と同じ韻目の字を使うこと)に注意する
起・承句は避けるものとするが、結句もなるべく避けた方がよい

※ 漢詩では下三字に限り、韻文重視の観点から、漢文の基本に逆らって、「返読したり、返読すべきところをしなかつたりすることも許される」が、濫用は慎むこと。 ❀

○実作の手引き 「漢詩入門韻引辞典」 飯田利行より

- ・句読点、テニヲハのつけ方 (近体詩の訓読文は) p86 ❀
 - ・全て第一句に読点(、)を、第二句に句点(。)をつけるのが常識である
 - ・意味上、続けないで間(ま)をおいた方が適切と思われる個所は、一字空けにする
 - ・訓読文の場合に韻文・散文ともに、単なる主格を表すときは、「ハ」をつけなくてもよい
ただし詩語の余韻を伝えたいため、または特に強調したい場合にも「ハ」をつける。
さらに「ハ」をつけることによって反対の意を表す場合がある。

・語句間の間(ポーズ)のとり方 p89

- ・七言詩では四字目のところで間をとる
- ・テニヲハを省いて間をとると、本文の意味がより深長となり、これを訓読する際に自ずと“格調が出てくる効果”をもたらす。

* 韻文の場合は、格調を出すために、説明的な言いまわしは極力避けなければならない ❀

○起承転結

◆ 漢詩の「起承転結」 …… 「読まれるエッセイの書き方」 加藤明 より

1. 詩の内容を四つの要素に分ける“四分法”である …… 起承転結
2. この構成法の成否の鍵を握っているのは、「転」である
⇒ **一番書きたいことを「転」で書こう**

- ・「起」 …… 起句は、詠い起こし、主に情景描写による場面作りをする
{エッセイでは} 話の発端、きっかけ (ホップ) 25%
- ・「承」 …… 承句は、起句の場面を増幅して、詩の舞台装置を仕上げる
{エッセイでは} 話の経過、布石 (ステップ) 25%
- ・「転」 …… 転句は、視点または場面を転換する、結句の情感盛上げに寄与する
{エッセイでは} 感動・驚き・発見のシーンやエピソード 40%
- ・「結」 …… 結句は、転句と組んで、詩全体を完結する
{エッセイでは} 自然体(流れからはずれたものにしない) 10%

□ 起承転結は的絞りの作法手段 p16 「一から始める漢詩の作り方講座テキスト」 永光龍より

- ・起 : 詠い起こし、主に情景描写による場面(舞台装置)作りをする
～ 熟達者はここでよく破題(題意を説破する)が行われる
出来ればここで読者を惹きつける意外性(唐突でない)の工夫が欲しい
- ・承 : 起句の場面を増幅して、転結句へ移るために詩の舞台装置を仕上げる
- ・転 : 視点または場面を転換して、結句の情感盛り上げに寄与する
- ・結 : 転句と組んで詩全体を完結する …… 結句で「韻」が決まる
～ 破題をここまで持ち込むように組み立てる構成も多い

出来ればここで読者を唸らせ、読後感に余韻を放つものでありたい

□一首全体の構成は「起承転結」 p227 「はじめての漢詩創作」 鷲野正明 より

(1) 起句・承句の作り方

・視点を変えない。風景描写なら風景描写に徹する ❀

一句の中で、上四字が風景描写、下三字が心情、などとするとわかり難くなるので、避ける。

・転句・結句を導き出す仕掛け(伏線)を設けておく

(2) 転句の作り方

起句・承句から視線をかえ、意外性を持たせる

(3) 結句の作り方

全体をまとめる句ではあるが、起句・承句の流れとかけ離れないように

起句・承句の表現を活かすように

(4) 「ことば」が緊密に結びつき、むだな「ことば」がないように

※ 詩は、こころの「おもい」をうたうものですから、安易に「心」「心情」などの直接的な「ことば」は使わない方がよい ❀

説明的になったり、理屈をこねたりせず、また抽象的にならないように、情景が目に見えるように具体的に描写することが大切

□「起承転結」の原則について p227 「漢詩はじめの一步」 鈴木淳次 より

① 二句をひとまとまり(聯)として、流れを作ること (起・承)

② 四句とも同じような調子の、平板な印象の詩になることは避けること (転)

③ 全体を貫く“主題”を持ち、前半と後半を切断しないこと (結)

◎文章では、起承転結の「転」から考える … 「原稿用紙を10枚書く力」 斎藤孝 より 【参考】

考える順番でいえば、「転」が最初。つまり、「転起承結」なのだ。 ❀

・「転」を思いついたなら、実は「起・承」もできているものなので、無理にでもくっつける。

・「結」は最後にとりあえず考えれば大丈夫。「転」を思いついたら、命(いのち)にして書く！

「転」というからには、「ところがこうなんですよ」と言いたいことがあり、何かが変わっている。

その前提となるのが「起・承」の部分だ。

□お勧めの作詩手順 p227 「漢詩はじめの一步」 鈴木淳次 より

※ まず一句を作り上げ、それを結句に置くことを前提とする

① 次に、起句と承句の下三字を考える

(結句と同じ韻目で、起句と承句が押韻するから)

② 起句・承句の下三字が決まるから、転句を考える

(絶句における転句の役割は重要なので、早めに決めれば楽なので)

③ 起句と承句では直接、主題には触れずに、伏線として描く

(承句と結句のつながりに配慮しておく)と、まとまりやすい

④ でき上がった句を並べてみて再点検する

・起承転結の図式 p93 ⇒ (代表的な図式あり) 「漢詩作詩小事典」 進藤虚籟 より

起承転結に、訓読する場合に適当な返り点や、一・二点の読み読みおくりが入るようにする。あまりにヒックリカエルところが多いのも騒々しく、理屈っぽくなり易い。

唯、結句の終り三字はカエル方がよくまとまる。 ❀

○作詩技法

□作詩技法の要点 p85 「漢詩作詩小事典」 進藤虚籟 より

やさしい、誰にでも判るような言葉で、深く味わいのある詩が作れば、それが理想。

要するに、難しい字は使わずに、やさしい字で自分のよく理解していることを詠むようにすることが大切。

～ 難しい韻をふむのは、詩想に窮して、苦しまぎれに当て嵌める態のものだ。

・昔から入門書で教えていることは、
「転結から作る」こと、「起承の句は一組、転結の句は一組の結びつけて作れ」と。 ❀

・「起句と結句を一組」と考えて作るのがよい ⇒ **完成・未完の目安!**
一首が出来ているかいないかの目安として～、起句と結句の意味に関連がないと、一首のまとまりが成り立っておらずチグハグな作であることが多い。
起句・結句を読んで意味が通じれば、一首は大きな破綻は起こしていない。 ❀

□**作詩の要点** p97 「漢詩作詩小事典」進藤虚籟 より

- ① 出来た時に、やたらにサンズイが多かったり、シンニューが多かったり、偏旁の同じ字が多出するときには一考を要する
多くの場合、語の無駄や重複が見つかる
- ② **視覚と聴覚**を適当に塩梅する … “色”や”音“の対比なども大事だと思う N
起句・承句が視覚による情景を詠んだならば、転句・結句はそのいずれかに、聴覚ないし形而上学的な、精神活動を表現することがよいし、逆も言える
律詩の対句の場合には非常に重要だが、絶句の場合も大切なことである
- ③ **殺し文句**を考えよ
- ④ 難しい字を避けよ
- ⑤ **虚字**をうまく使うこと
いわば詩の調味料のようなもので、詩の持ち味を生かす上に貴重である
- ⑥ 「漢詩は名詩の換骨奪胎だ」と言う人がいるが、そんなものであってはならない!
常に、創作であって、模倣や部分盗用などは最も卑しいとされているのだ

□**作詩の要訣(修辞法、熟字(語)、単語・成語)** p60 「漢詩入門韻引辞典」飯田利行より

絶句においては、第三句目の**転句**が最も大事でこれが目玉になる。つまり転句の設定いかんによって全篇の活殺が左右される。

もし、起句承句をだらだら並べ、肝腎な転句を量し、そのうえ結句で起句承句に照応させることを忘れると、いわゆる「竜頭蛇尾」となる。

漢詩・漢文の修辞法では、語文の序列において下に置かれる語ほど意味が強調される。したがって語の上に冠せられ上積みされる語ほど意味が軽いということ。

さてこそ絶句作法の捷徑(ちかみち)は、先ず下三字をならべ、ついで各句に相応しい修飾言を上を冠せること。つまり下三字が強調されるべき実辞で、上の二字はお飾りだということである。

詩句は熟字(語)より成る詩語によって構成され、またそれを補うために修飾語がつけられる。さらに熟字の連なりにより語・句の強弱度を示し、語・句が置かれる上下の位置によって規定される。その場合、下に位置するほど重さ加わる。その結果、押脚韻句の下三字が最も重要となる。

付言すれば、単語の場合は下字が強調され、成語の場合は下句が強調される。

□「**良い句**」か「**悪い句**」かを、**チェックするポイント** p209 「漢詩はじめの一步」鈴木淳次 より

- ① 二・二・三(または四・三)のリズムを守っているか
- ① 一人称の主語を無駄に入れていないか
- ② 感情形容詞を安易に使っていないか
- ③ 比喩は最適なものを選んでるか
- ④ 畳語を使い過ぎていないか

・『**殺し文句** **キャッチフレーズ**』のような凝縮された文句を工夫する 「漢詩作詩小事典」進藤虚籟 より
詩の上手、下手はいかに「殺し文句」を効果的に使うかにある。
私は起承転結の順に読んでいます。各自が自分に適した詠法の呼吸を覚えるのがよい。

・**詩に最も大切なもの** p102

「**詩の生命は、新鮮な香気にある**」ことを知る。

どんなに技術的に巧妙であっても、香気の失せた作品は、造花みたいなものだ。

先人の作を多く読んで、自由に出来るようになったら、他の人の真似をしないこと。

安易に、気軽に、他のひとの作品の一部を使ったりすることは批判的にならざるを得ない。
創作とは、そういうもので、厳しくなれば、自から、自分の作品の純度を高めようと、誰しもが自負する性質のものなのだ。 P103

・前提条件として(補足) p109

自分で勝手に言葉を造ってはならない

日本語で発音して、俗っぽい響きや卑語を連想させる語句は使わない

□最近読んだ中国人の詩話として ❀ 「漢詩便覧」(綿引方風)より

- ・詩の作り方は、始め結句を考えて韻を選べ。
- ・情の含まれない詩は詩ではない。無情不作。
- ・作詩の基礎は、句作りにある。一語から始めよ。
- ・詩品とは、「言尽きて、情尽きず」「状物、画くが如し」「品格・雅味が多い」
- ・詩に矛盾なく重複なく、簡潔で、無用なものなく、
游詞華調の詩病なく「景・情・議」あるもの

○創作の完成 p23 「一から始める漢詩の作り方講座テキスト」永光龍より

- ① 詩題、②漢詩本文、③書き下し分(和訓)、④語訳、⑤通釈文
の五点が揃って一人前で、どれ一つ欠けても充分でない

・推敲の注意点

- ・矛盾撞着(混同/混乱、齟齬)がないか？

季節や朝・午・夜、天候(雨・曇り・雪・晴れ)、視点位置、主観/客観

- ・言葉や調子(リズム)が生硬(未熟、難解硬直、なめらかさを欠く)
- ・景色の叙述だけに止まる詩は詩格(詩の品格)が低い ~「詩は志なり」
- ・語訳が、辞書通りか？(自己流に都合よく枉げて書くのは厳禁)
- ・通釈文が、漢詩本文の筋書き以外のことを訳文で補ったものは見苦しい

~ 推敲は日時を改めた方が、より客観的で多角的視点から判断できる

○漢文の語法

- ・漢文の基本形 ❀ 「漢詩便覧」(綿引方風)より 【補足として】

- ・客語(目的語)は「を」がつく
- ・補語は「に」がつく
- ・補語は又「と」「よりも」「より」などがつく

(注)月出東山=月出従東山 は同じ …

ヨリ や ヨリモ は訓ずることが出来るから、字数が足りれば置字は不要。足りなければ「従・自」を入れたり、置字の「於・于・乎など」を足して作ればよい。 ❀

※座右の銘 (素愚)

- ・陸游「示子適(子適に示す)」の最後の句が“新鮮な驚き”として、大へん参考になった！(N)

汝果欲學詩 汝果たして詩を学ばんと欲せば
工夫在詩外 工夫は詩外に在り

【訳】 ⇒ おまえがもし詩を勉強しようとするのなら、努力を詩以外のところにそそぐべきだ。
(努力すべき点は詩作の技術以前にあるのだ) ❀

【参考】エッセイの書き方と漢詩の「起承転結」

・・・ 漢詩を作るときにも、初心者にかぎらず参考になると思います

◆ エッセイの書き方

○うまいエッセイとは … 「原稿用紙を10枚書く力」 斎藤孝 より

エッセイは、作者が体験した日常的な出来事を題材として書かれる。
過ぎ去ってしまった出来事が、いま実際に体験しているかと思えるほどリアルに書かれているとしたら、それを読んだ人が作者の体験を共有できる。うまいエッセイストは、そういう書き方ができる人だろう。ふつうの体験にすぎないことでも、おもしろく書くとなると、自分が本当に良かったと思ったこと、面白いと思ったことを取り出し、どう感じたかを表現するという高度な技が必要になってくる。

読んだ人が「なるほど、そういう面白いとらえ方があるのか」という切れ味のある部分を取り出せるのは、書く人のセンスにかかっている。
このセンスを磨くのが、書く力をつけるうえで重要なポイントになる。

○エッセイの基本的要素 … 「読まれるエッセイの書き方」 加藤明 より

文章は、「**分かりやすい、平易な文章**」であれば十分

(一般的には、原稿用紙3～5枚程度)

- ・ 表現 … 文章力のこと ⇒ 表現力は【才能】～どうしようもない
書き出しの文章には、知恵を絞る ～広告でのアイキャッチ
- ・ 構成 … 話の進め方、順序 = 「起承転結」のこと
- ・ 内容 … 赤の他人が興味を覚えるような“ネタ” ⇒ 運
読まれるネタは、リアルに描ける自分が一番詳しい世界がよい
一番書きたい内容を絞る ～あとは全部捨てる

○エッセイの極意 … 「読まれるエッセイの書き方」 加藤明 より

・飽くなき好奇心 ・鋭い観察力 ・旺盛なユーモア精神 の(三位一体)

「もっと読みたい」と、思わせる文章を書く

赤の他人にとって、おもしろいか、つまらないか意識しているか

◆ 漢詩の「起承転結」 … 「読まれるエッセイの書き方」 加藤明 より

1. 詩の内容を四つの要素に分ける“四分法”である … 起承転結
2. この構成法の成否の鍵を握っているのは、「転」である
⇒ **一番書きたいことを「転」で書こう**

- ・「起」 … 話の発端、きっかけ (ホップ) 25%
起句は、詠い起こし、主に情景描写による場面作りをする
- ・「承」 … 話の経過、布石 (ステップ) 25%
承句は、起句の場面を増幅して、詩の舞台装置を仕上げる
- ・「転」 … 感動・驚き・発見のシーンやエピソード 40%
転句は、視点または場面を転換する、結句の情感盛上げに寄与する
- ・「結」 … 自然体(流れからはずれたものにしない) 10%
結句は、転句と組んで、詩全体を完結する

◎文章は起承転結の「転」から考える … 「原稿用紙を10枚書く力」 斎藤孝 より ❀

考える順番でいえば、「転」が最初。つまり、「転起承結」なのだ。

「転」を思いついたなら、実は「起・承」もできているものなので、無理にでもくっつける。「結」は最後にとりあえず考えれば大丈夫。「転」を思いついたら、命(いのち)にして書く!

「転」というからには、「ところがこうなんですよ」と言いたいことがあり、何かが変わっている。その前提となるのが「起・承」の部分だ。

【参考】「起承転結」は、読む技術を上げる有効な方法

どこが「転」なのか、という一点を見極められるかどうか、ポイントに